

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	梅木 璃子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>日本人英語学習者を対象とした語用論的知識測定法の開発： 電子メールにおける「依頼」発話行為に着目して</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 小野 章</p> <p>審査委員 教 授 永田 良太</p> <p>審査委員 教 授 松浦 伸和</p> <p>審査委員 准教授 西原 貴之</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>「依頼」は電子メールで頻繁に使用される発話行為であるが、相手の行動に制限をかける行為でもあり、円滑な意思疎通を行うためには学習者にとって大きな困難が伴うことが指摘されている。本論文では、日本人英語学習者による「依頼」発話行為を含む電子メールの傾向を調べた上で、その結果を反映させた評価ルーブリックを作成した。加えて、評価ルーブリックの妥当性の検証も行った。</p> <p>第1章では、本研究の目的、背景、及び論文の構成について述べた。言語使用の適切さ（語用論的知識）に関する指導の社会的要請が高まっている。その一方で、対面コミュニケーションと比べ、電子メールでは非言語的情報の使用に制限があり、相手に誤解を生んでしまうリスクが大きい。電子メールの使用機会がこれほど多い現代社会において、関連した語用論的知識の育成は急務であると言える。これらのことを研究の背景として指摘した。日本人英語学習者に適切な電子メールを作成させるための研究は少なく、特に学習者のパフォーマンスを評価するための研究はほぼ見られないことから、本研究の意義を述べた。</p> <p>第2章では、英語を母語としない学習者の電子メール研究を概観した。先行研究では、「依頼」発話行為を含む電子メールでの言語使用には、5つの要因（要素の選択順序、英語習熟度、力関係、社会的距離、メールへの慣れ）が影響を与えていることが示されている。しかしながら、日本人英語学習者を対象とした研究は少なく、さらに指導において必須となる具体的な評価ルーブリックが未確立であることが明らかにされた。そこで、次の2点を研究課題として設定した。</p> <p>(1) 日本人英語学習者による「依頼」発話行為を含む電子メールにおいて、要因（要素の選択順序、英語習熟度、力関係、社会的距離、メールへの慣れ）が言語使用にどのように影響しているのか。</p> <p>(2) 研究課題(1)の結果を踏まえて開発された評価ルーブリックは、「依頼」発話行為を含む電子メールを評価するのにふさわしいものか。</p> <p>第3章では、研究課題1について、日本人大学生英語学習者に架空の状況設定で電子メールを作成させ、そのパフォーマンスを考察した。調査に先立ち、「依頼」発話行為を含む電子メールの先行研究をもとに、学習者のパフォーマンスを分析するための枠組みとして、(a) フ</p>			

フレームムーブ（電子メールのオープニングとクロージング部分）、(b) ストラテジー（命令やほのめかしなど「依頼」発話行為を遂行するための手段）、(c) 内部修正（「依頼」が遂行される部分で「依頼」の直接度を調節するための言語表現）、(d) 外部修正（電子メール内の他の部分で「依頼」の直接度を調節するための言語表現）、の4カテゴリー（及びその下位カテゴリー）からなるフレームワークを作成した。分析の結果、日本人英語学習者は、(a) フレームムーブの順番を意識している、(b) 習熟度が高い日本人英語学習者は間接的なストラテジーを選択し、習熟度が低い学習者は直接的なストラテジーを選択する、(c) 内部修正を1つしか使用しない、(d) 電子メールの相手と力関係がある場合は「前置き」を、力関係が無い場合は「方向づけ」と「理由の提示」といった外部修正を使用する、という傾向が観察された。

第4章では、研究課題2について、まず、調査1の結果と Arter and McTighe (2000) のルーブリック作成手順に従い、「依頼」発話行為を含む電子メールパフォーマンスの評価ルーブリックを作成した。結果として、第3章で設定した4つのカテゴリーに (e) 内容伝達（「依頼」の内容が伝わるか否か）、を加えた5規準からなるルーブリックとなった。そして、ルーブリックを用いて、「依頼」発話行為を含む電子メールを5名の評価者で評価した。評価者による信頼性（評価者の厳しさの違いが小さく、評価者間の一致度が高く、評価者内の評価が一貫していた）と評価基準識別力が概ね確認され、評価ルーブリックの妥当性が示された。

第5章では、本研究の総括を行い、教育的示唆と今後の課題を述べた。本研究で作成した分析フレームワークや評価ルーブリックを使用することにより、「依頼」発話行為を含む電子メールのパフォーマンスに関して、学習者はどのような知識がどの程度不足しているのか、どのような知識に関して指導すればよいのか、具体的な検討が可能となる。また、第3章で得られた日本人英語学習者のパフォーマンスの傾向を踏まえた上での指導も可能となる。その一方で、開発した評価ルーブリックの妥当性のさらなる向上や汎用性（本調査の協力者とは異なる英語力の学習者のパフォーマンス評価にも利用できるのかどうか）の検証が今後の課題として示された。

本論文の独創性は以下の4点にまとめられ、学術的及び教育的意義を高く評価することができる。

1. 日本人英語学習者にとって必要性の高い「依頼」発話行為を含む英語電子メールのパフォーマンスについて、実証的にその傾向を明らかにしたこと。
2. 今後の英語教育の実際の指導において利用可能なツールとして、「依頼」電子メールの構造の体系的枠組みと評価ルーブリックを開発したこと。
3. 綿密な分析により、妥当性を担保した評価ルーブリックとなっていること。
4. 本研究で提示されたルーブリック作成手順には汎用性があり、他の発話行為や背景の異なる学習者集団のための評価ルーブリックを開発することを可能にしていること。

本研究は、電子メールという現代的コミュニケーション・ツールでの日本人英語学習者のパフォーマンスをどのように向上させ、適切に評価していくのかという問題に対して、具体的な枠組みを示しており、今後の英語教育にとって重要な示唆をもたらしている。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 2 月 3 日